

Title	Factors associated with number of present teeth in adults in Japanese urban city
Author(s)	倉橋, 司
Journal	歯科学報, 119(2): 134-135
URL	http://hdl.handle.net/10130/4890
Right	
Description	

氏名(本籍)	倉橋 つかさ (東京都)
学位の種類	博士(歯学)
学位記番号	第1793号(甲第1067号)
学位授与の日付	平成20年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Factors associated with number of present teeth in adults in Japanese urban city
掲載雑誌名	The Bulletin of Tokyo Dental College 第58巻 2号 85-94頁 2017年 doi: 10.2209/tdcpublication.2016-2200
論文審査委員	(主査) 松久保 隆教授 (副査) 石井 拓男教授 山田 了教授 山根 源之教授

論文内容の要旨

1. 研究目的

高齢者における歯の喪失リスクに関する疫学的研究は多く報告されているが、成人における歯の喪失リスクに関する疫学的研究は少ない。本研究は、東京都足立区における老人保健法による基本健康診査および歯周疾患検診の結果を用いて歯の喪失に病歴、生活習慣、口腔内症状の状態などの要因がどの様に関連しているかを統計学的に求め、健康診査前の質問紙調査項目で歯の喪失リスクに関係の深い項目は何かを検索すると共に成人における健康教育の立案に役立てることを目的とした。なお、この研究は足立区の依頼によって老人保健法による歯周疾患検診における今後の健康教育立案のために行った研究である。

2. 研究方法

研究対象者は、東京都足立区における老人保健法による歯周疾患検診受診者(年齢40, 50, 60歳)で男性2,623名、女性5,118名の計7,741名である。診査は区内の5箇所の保健センターで行われ、既往歴と口腔保健に関する質問紙調査と口腔診査(歯の状態と口腔清掃状態)が行われた。性別年齢別に口腔内の症状(主に歯周疾患関連)、喫煙、食品摂取状況、定期的健診の有無、口腔清掃習慣などの保健行動に関する項目によって2群間に分け現在歯数の差の検定を行った。また、現在歯数が24未満になることに対する各要因について SAS Ver 9.1を用いた logistic 回帰分析を行い、調整オッズ比(年齢および性別で調整)を求めた。

3. 研究成績および考察

各年齢における対象者の男女比はおおよそ1:2であった。40, 50, 60歳の24歯以上をもつ対象者はそれぞれ約98%(98%), 93%(95%)および77%(81%)であった(カッコ内は女性)。40, 50, 60歳の一人平均現在歯数は、それぞれ27.7(27.6), 26.1(25.9), 22.9(23.5)であった。これらの値は、ほぼ同時期に行われた歯科疾患実態調査の結果とほぼ同じであった。

性・年齢別に口腔症状や保健行動に関する項目によって2群間に分けたときの現在歯数の平均値に男女で有意差が認められたのは、動揺歯および喫煙であり、その他の要因で男性において有意に認められたのは糖尿病の病歴、女性では乳製品の摂取状況、口腔清掃状態と口腔清掃指導の有無であった。現在歯数が24未満になることに対する要因で有意なものは既往歴では糖尿病(調整オッズ比:1.72)、生活習慣では喫煙(1.86)、塩味を好む(1.23)、甘味食品の頻回摂取(1.29)および乳製品の少ない摂取(1.22)、口腔状態では、口腔清掃状態不良

(2.04), 動揺歯(1.82), 歯肉の腫脹(1.40), であった。

4. 結 論

これらの結果は、現在歯を24未満にする関与する因子として口腔清掃状態、喫煙、糖尿病の既往歴、動揺する歯、歯肉の腫脹であり、成人期における歯の喪失リスクを下げる健康教育はこれらの項目に重点を置くべきであることを示唆している。

論 文 審 査 の 要 旨

高齢者における歯の喪失リスクに関する疫学的研究は多く報告されているが、成人における歯の喪失リスクに関する疫学的研究は少ない。本研究は、東京都足立区における老人保健法による基本健康診査および歯周疾患検診の結果を用いて歯の喪失に病歴、生活習慣、口腔内症状の状態などの要因がどの様に関連しているかを統計学的に求めた。現在歯数が24未満になることに対する要因で有意なものは糖尿病の既往歴(調整オッズ比:1.72)、生活習慣では喫煙(1.86)、塩味を好む(1.23)、甘味食品の頻回摂取(1.29)および乳製品の少ない摂取(1.22)、口腔状態では、口腔清掃状態不良(2.04)、動揺歯(1.82)、歯肉の腫脹(1.40)、であった。これらの研究は、口腔清掃状態、喫煙、糖尿病の既往歴、動揺する歯や歯肉の腫脹の有無が歯の喪失リスクと関係が深く、成人期における歯の喪失リスクを下げる健康教育はこれらの項目に重点を置くべきであることを示唆している。

本審査委員会では、1) 40歳から60歳での歯の喪失のリスク、2) 糖尿病の病歴や高血圧と歯周疾患や歯の喪失との関連性、3) 研究対象者の特徴、4) 研究対象者の現在歯数の分布とわが国の現状との比較、5) 考察での表現の妥当性、など関連事項について質疑が行われたが、概ね妥当な解答が得られた。また、論文の構成などいくつかの指摘があり、訂正など行った。本研究で得られた結果は今後の歯科医学の進歩、発展に寄与するところ大であり、学位授与に値するものと判定された。